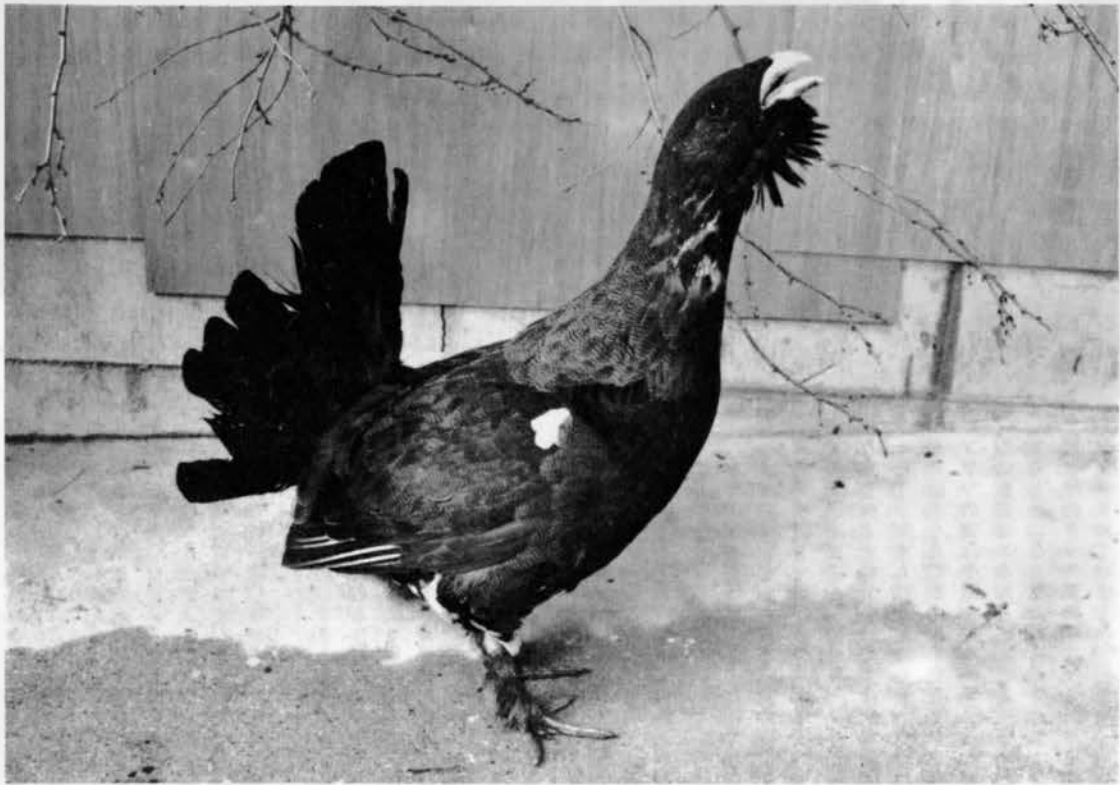


山と博物館

第31巻 第4号

1986年4月25日

大町山岳博物館



初来日のオオライチョウ(オス)

オオライチョウを迎える

大町市で迎えたオオライチョウは、大町市と友好提携を結んでいるインスピルク市のアルプス動物園から、日本で開催されたチロルフェア(主催・オーストリア観光局・チロル州観光局)を記念して、3月25日に大町市へ贈呈された。

昨年4月、アルプス・マーマット贈呈のために来市したアルプス動物園長が、大町山岳博物館のライチョウ飼育増殖研究の状況を視察し、贈呈の話がだされて実現したものである。

山岳博物館にとっては非常に嬉しい話であった。とくに、長年にわたって大町市民をはじめ、多くの人々の温かいご支援や協力によって進められてきたライチョウ保護増殖の開発研究が、予想もしなかった面から評価を受けて、オオライチョウ贈呈の話に発展したことであった。

贈られたオオライチョウは、アルプス動物園長の親友であるハンス・アシェンブレナー博士がおられる西ドイツ・バイエルン州のノイクリッペンにあるオオライチョウ保護増殖研究所で孵化育成された個体である。

残念なことに雌は長時間の輸送の無理が原因となつて、到着時には死亡するというかわいそうな事故が起きた。しかし、雄はすこぶる元気で収容した馴致舎にもなれ、近いうちに新設されたオオライチョウ舎に移されて、4月25日には一般公開される予定である。

(平林国男)

動物たちの落し物、残し物

千葉 彬 司

北アルプスの山々には特別天然記念物のライチョウ、カモシカをはじめ大小さまざまな動物が、それぞれ思い思いの環境の中で生活しています。

それらの動物たちは広大な山の中でどんな生活をしているのでしょうか。今までにその生活の実態が比較的詳しく調査されているのはニホンザル、ライチョウ、カモシカくらいのもので、そのほかの多くの動物たちの生活は不明の部分が多くなり残されています。

彼らの生活を知るためには、彼らの生活する場所に入り、行動様式や食物など細かなものをひとつひとつチェックしなければなりません。しかし北アルプスの山々は険しい山や谷が連なり、そんな環境の中を自由に活動する彼らを追跡することは容易なことではありません。その上、彼らは大変警戒心が強く、人が近づくと木陰に身をかくしたり、足早に逃げ去ってしまいます。そしてさらに具合の悪いのは、多くのものが早朝や夜に行動することです。

しかしながら、そんな彼らの生活も、追跡して調査ができなくても、その生活の一端を伺い知ることはできます。

それは彼らの「落し物」——糞内容を分析することによってどんな食物をとっていたかがわかります。一般的に肉食や雑食の動物は小さな骨や毛、羽毛、種子なども一緒に食べ

てしまうので排泄された糞の中にこれらのものは未消化物として残っています。この未消化物を調べることによって食物となった動物や植物の種類がわかります。また、肉食の鳥類も羽毛や毛、細かい骨などを一緒に食べ未消化物だけをひとかたまりにして吐き出します。これをペリットといっていますが、これも糞同様、その未消化物によって食物内容を

知ることができるところです。
この糞やペリットなどの落し物のほかに、彼らの「残し物」——足跡、食べ跡、休息跡、寝跡、角とき跡、皮はぎ跡といった、動物の



サルが木の皮をかじった跡

種類によってさまざまな生活痕跡を残しています。この生活痕跡によって、どんな種類の動物がそこに生活しているのかを知ることができます。

私たちは殆どの人々が見落してしまったり振り向きもしないようなものを求めて北アルプスの山中をさまよいます。ここでは北アルプス高瀬川流域にすむ彼らの生活内容の一端を、落し物、残し物から紹介しましょう。

ニホンザル

新しく高瀬川にできた七倉ダム、高瀬ダムを中心に4つの群が生活しています。木の葉の生茂る夏にその姿を目にするには極く少ないのですが、冬から早春にかけてはしばしば目にするようになります。新しい糞の分布の観察などから彼らは冬から早春にかけてはダム湖や本流、支流の川岸の部分を集的に利用していることがわかりました。

また、残し物の食べ跡からその頃は9種類の木の皮がエサとして食べられ、その中でもノリウツギが圧倒的に多く利用されています。

ニホンツキノワグマ

クマの姿を見かけることは稀ですが、通称「クマの棚」といわれる採食跡はよく見かけられます。クマの棚が作られる樹種はミズナラの大径木が多く、折り取った枝からドングリを食べると自分の尻の下に次々に敷いていくので、何本も枝が重なりあつた棚は、あたかも巨大な鳥の巣のように見えます。このドングリの実は冬眠をするクマにとって、冬の間の重要なエネルギーである皮下脂肪を蓄積するものになるものと考えられます。その証拠に秋のクマの糞の中にはミズナラの実が多量に含まれていました。

クマはさらに木の皮を爪で剥ぎとることも



クマの棚

し、通称「クマ剥ぎ」と呼ばれていますが、これもクマがそこに生活していたことを示す痕跡です。

ホンドキツネ

キツネの糞は登山路上とか、ちよつと高い岩の上や、見通しのきく雪渓上などで多くみられます。

糞内容の大半を占めるのはノウサギですが、昆虫類（シテムシ、ゴミムシ、カミキリムシなど）、齧歯類（ヤチネズミ、カゲネズミ、リス、モモンガなど）、鳥類、食虫類、植物（サクラの種子、タラノキ）、そして稀にカモシカを食べたものもあります。

カモシカを食べたものは生きたカモシカを襲って食べたのではなく、雪崩や老衰で死亡



キツネのフン

したものを食べたものでしょう。また、中にはどうしてこんなものを食べたのであろうかと首をかしげるようなものも含まれています。それは、タバコのフィルター、輪ゴム、梅漬の種子、ソーセージの皮、アルミホイル、軍手の切れはし、セロハン紙、ビニール類といったもので、総て人が捨てたものです。これはダム工事に従事した人や、槍ヶ岳や鳥帽子岳への登山者が捨てた残飯をあさって食べたものと推測され、国立公園内の環境の汚れがキツネの食生活にまで影響を及ぼしているのです。

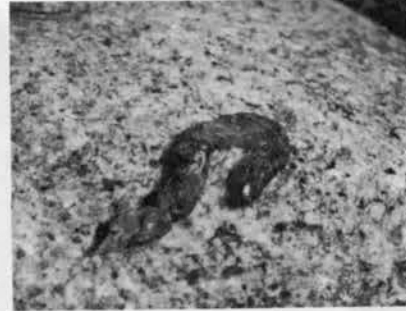
ホンドテン

テンの糞の内容物の多くを占めるのは、齧歯類のヤチネズミ、ヒメネズミなどのネズミ類ですが、7月8月の夏の時期には昆虫類(スズメバチ、クワガタムシ、フキバツタ、アリ、オサムシ)を多く食べています。

また、秋には、植物(ウワミズザクラ、ヤマブドウ、キイチゴ、ウド、オオカメノキ)



キツネの足跡



テンのフン

の果実が沢山採られていきます。これらを見ますと、一口に肉食獣といつても季節によってその食性に变化があることがわかります。さらに、テンはキツネと違って木登りが巧みなどころから小鳥類も捕えて食べています。

そしてテンもキツネと同様、輪ゴム、ビニール片、ゴム引き布片、アルミホイルといったゲテ物を食べていますが、キツネほど多くはありません。

二ホンアナグマ

アナグマはまったく種々雑多なものを食べています。ノウサギ、リス、ネズミ類、ヘビ、ヒキガエル、ゴミムシ、ハサミムシ、ヤマブドウ、カキ、ブドウ(栽培種)、梅漬の実、輪ゴム、アルミホイル、タバコのフィルター、軍手の切れはし、セロハン、ゴムの断片、といった内容で、食べられると思ったものは何んでも手あたり次第に食べてしまったのではないかと思うほどです。

採集月	和名	糞数	糞内容物 (出現糞数と割合)									
			食虫類	ノウサギ	齧歯類	カモシカ	鳥類	両生類	昆虫類	果実	残飯類	その他
5月	キツネ	62	2 (3.2%)	40 (64.5%)	16 (25.8%)	1 (1.6%)	7 (11.3%)	0	5 (8.1%)	2 (3.2%)	12 (19.4%)	6 (9.7%)
	テン	50	4 (8.0%)	20 (40.0%)	26 (52.0%)	1 (2.0%)	4 (4.0%)	0	7 (14.0%)	5 (10.0%)	6 (12.0%)	2 (4.0%)
7・8月	キツネ	22	0	11 (50.0%)	7 (31.8%)	0	1 (4.5%)	0	9 (40.9%)	2 (9.1%)	12 (54.5%)	0
	テン	31	0	3 (9.7%)	3 (9.7%)	0	8 (25.8%)	1 (3.2%)	27 (87.1%)	5 (16.1%)	2 (6.5%)	1 (3.2%)
9月	キツネ	5	0	4 (3.8%)	1 (3.8%)	0	0	0	3 (38.5%)	1 (76.9%)	4 (31.5%)	0
	テン	26	0	1 (3.8%)	1 (3.8%)	0	2 (7.7%)	0	10 (38.5%)	20 (76.9%)	0 (11.5%)	3 (11.5%)
12月	キツネ	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	テン	7	2	1	3	0	1	0	3	1	0	2
計	キツネ	89	2 (2.2%)	55 (61.8%)	24 (27.0%)	1 (1.1%)	8 (9.0%)	0	17 (19.1%)	5 (6.2%)	28 (31.5%)	6 (6.7%)
	テン	114	6 (5.3%)	25 (21.9%)	33 (28.9%)	1 (0.9%)	15 (13.2%)	1 (0.9%)	47 (41.2%)	31 (27.2%)	8 (7.0%)	8 (7.0%)

(宮尾ほか「高瀬川流域の哺乳動物に関する研究」より)

二ホンカモシカ

高瀬川流域は古い時代にはカモシカ狼の猟場として知られていました。私たちが調査に入った頃もその姿をしばしば目にしました。

春先には雪消えの早い草付きの急斜面でよく採食をしています。カモシカが採食を終えて移動した後、そこに行くところまで植物を食べたばかりがわかります。この頃には芽吹いたばかりのフキノトウやウド、ギョウジャニンニクなどを食べていました。

また、この急斜面の下の方の雪の積み重なった中からバラバラになったカモシカの死体もみつかりました。冬のエサの乏しい時期に雪崩の跡に顔をのぞかせた青々とした植物に心をうばわれ、それを採食しているうちに第二の雪崩に襲われたものであろうと推測されました。

カモシカの食物は植物の生活サイクルに密着した適応をしているといえます。

* * *

動物たちの落し物や残し物、それはそこにすむ彼らの生活を物語ってくれます。

彼らの糞の中から発見された人工的な異物は、環境の汚染を示しています。私たちが何気なしに捨てた物が、彼らの生活に影響を及ぼさないためにも、ゴミは持ち帰るようにしたいものと思います。

(山岳博物館 学芸員)

参考文献 宮尾雄雄ほか(一九八〇)高瀬川流域の哺乳動物に関する研究 高瀬川流域自然総合
追跡調査報告書



アトリエからみた白馬連峰

白馬とわたし

高田 正二郎

右より小蓮華、白馬、杓子、白馬鑓、天狗尾根、不帯峯、第一峰、二峰、三峰、唐松へと続き、五龍、鹿島槍の南峰北峰が、一望の視界に入るのが私のアトリエの構図です。刻々と変容する嶺々の様相に備えて、相對峙する画架は二基、絵具はパレットに出したままというわけ。この窓の特色は、無料で架設してくれる中部電力の電柱をお断りして、自費で地下ケーブルに電線を埋設して、白馬連峰の大自然を目の前に感動することができるところです。「俺は白馬に来て、電柱を見に来たのでない。山を描きに来たんだ」と中部電力の職員とわたり合ったことは、誇らしげな想い出として心の底に刻みこんでいることなのです。自然を大切に、環境をそのままにとい



五龍を描く

うかけ声の言葉と裏腹に、自然破壊の実態には、一人ひとりの防戦が必要ではないでしょう。金銭に変え難い人間優位の価値とは、天より授かった物心の喜びであるわけです。アトリエの前の池には、天然記念物の八丁とんぼが棲み、融雪の頃の水芭蕉が咲き競います。やがては、露の薫、たらの芽の山菜が興を添えてくれます。雪解の譜は、綾織りなす自然の絵模様です。春秋限りなく美しく、晩晴、晨、朝焼けの白馬の嶺々は、まことに神祕圧感、私が白馬から賜った宝物といつてよく、雪晴れ、蒼雨、旗雲、夕陽、残照、星空、月明……、まだ、まだ、描ききれない命題が頭の中を去来します。

絵具を出したまま、ベッドに入り、一眠りしては、また、描き続けることのできるこの仕事場は、まさに、天から授かった正精進の道場であると思います。

日々好筆、陽が西に傾く頃は、山々の後の空は金色に輝き、阿弥陀様のご来迎が、光芒はなつ後光を背に舞い降りる姿も想像できるのです。思わず合掌のポーズをとり、太陽神に、ただ感謝、生きている俸せを心にいい聞かせる眼を閉じてしまふのです。

小鳥たちの囀る楽の音は、天蓋より降り散る愛のささやきの如く、聴界の楽園を現出します。遠くに郭公、家にはきつつき、兔、りす、山の友だちとも仲よくなりました。

浄らかな心になりきることのできる、このアトリエは、摩訶般若、即ち、巨いなる知慧の心が湧く、創造の道場であるといつてよく、知慧と創造、今の私は、白馬の山々の麓に座して、絵筆を握りしめる法悦に浸っている近頃です。

(画家)



窓からみた水芭蕉

※高田先生は白馬村落倉にアトリエを構えて作画に励んでおられます。ここに掲載した二枚のスケッチは先生のご好意により当館へ寄贈された作品です。(編集部)

山と博物館 第31巻 第4号

発行所 長野県大町市 一九八六年四月二十五日発行
TEL 220-2111

印刷所 長野県大町市依町 大町山岳博物館
大栄タイムス印刷部

定価 年額一、二〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号(長野四一三三九九三)